京都春期特別集会（1）聖霊降臨節

聖霊のバプテスマ

――使徒行伝第2章、他――

１９７８年5月21日
小池辰雄

第二の宗教改革　神の根源語　人間の中心は霊　聖霊のバプテスマ　無即無限無量　根源現実
預言者は単独者　個即全・全即個　本当の霊止　キリストはわがために砕けたもうた　無我・
無私　信入・祈入　魂の問題

【使徒2】

1五旬節の日となり、彼らみな一処（ひとところ）に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言（ことば）にて語りはじむ。

●第二の宗教改革

聖書はドラマ、劇なんです。劇というと、シェイクスピアは世界最大の劇詩人です。ドイツのゲーテすらもシェイクスピアには降参して、大変な詩人だと言うわけなんですが、また、シェイクスピアもとてもかなわないのがこの聖書という劇の本なんです。聖書という劇がなかったら、シェイクスピアもダンテもゲーテもドストエフスキーもユゴーもいないわけです。それだけこの聖書というオラトリアム、神聖な劇はユニークなものです。

「万巻の書のうちのただ一つの本」

というのがこの聖書です。皆さんはその世界最大の劇の書を持っていらっしゃる。そういうわけで、「聖書」なんて言って、もったいぶらないでください。聖書の中にはあらゆる人間の現実が書いてある。歴史的な史劇です。天地創造から万物の完成、新天新地、神の国の最後の国の到来まで――創世記から黙示録まで――の史劇であってこんな素晴らしい本はないわけです。どうぞ、そういうことで、この聖書に立ち向かってください。

しかも、劇をただ眺めているのではなくて、その時にその場において自分が劇中の人物になって、読むのではなくて、活劇の中に自分が一員として入る。信仰というのは、入ることなんです。信入する。信じ入るところの「信入」です。

「信ずるとは信入することなり」

という。こっちでただ安閑としていて、「信じました」なんていう心理的なものではない。

全存在で、あるがままの自分をその中に投げ入れる。これが信ずるということです。もう今までのいわゆる信仰概念を突破しなければ、ぶち破らなければダメなんです。

今日の集会は、

「第二の宗教改革」

という隠れた題を持っています。第二の宗教改革は、あなた方一人びとりがやる。第一の宗教改革は、ルターやカルビンというのがやりましたけれども。もうこの末の世においては各人がこの第二の宗教改革を自ら実現する。

「そういう宗教改革者が出てこないかな」

ではない。あなた方一人びとりがその第二の宗教改革者にならなければ。第二の宗教改革者になるには、そのように信入することなんです。敵中に侵入するのではない。神の国に信入する。神の国に信入するというわけです。私はこの

「信入」

という言葉はいつか使ったか知らんけれども、今日非常に皆さんに訴えたい。そして、あなた方の心の中に私は侵入します。そういう気持で聖書というものにぶつかってください。シェイクスピア以上の劇文学であるということです。

●神の根源語

「御霊に導かれるとそこに自由あり」

というが、我々に霊法が働く。

「叩けよ、さらば開かれん」

と。私という門を叩いて何か響きを出そうと思って、私に体当たりして来られる方々がおられる。私は本当にうれしい。私に来るところのキリストの事態をお伝えすることが私の歓びですから。私自身は何もない。私は何もない。私はキリストの絶対恩寵におけるところの

「キリストの無者」

である。どんなに誤解されても、私はそう言います。そういう言葉が何を内容としているかということは、とうてい説明しきれません。

聖書は、この文字の奥から響き、呻き、叫び、讃美している、そういう大音楽です。ベートーベンが第九シンフォニーの最後にもうやりきれなくなって、シラーの言葉を使いました。そういうような神の根源語がこの奥から響いてくる。聖書の文字そのものが暗号なんです。パウロが、

「儀文は殺し、霊は活かす」

と言った。生きている霊が活かすんです。この御霊は聖言と分けることができない。マルチン・ルターが本当に神の言葉をそういう角度からつかまえていた。また、捕まえられて

いた。だから、ルターの翻訳はいわゆる翻訳ではない。我々もそういう新しい聖書の訳が、ギリシア語やヘブライ語を更に乗り越えた奥の訳ができるわけです。ルターが、これは盛りきれないで、

「聖書は神の言葉のかけらだ」

と言った。あれほど聖言を尊重している人が、「聖書はかけらだ」と言った。私はこの言葉には驚いた。聖書は瓦のかけらみたいだと。

「神の言葉は無限無量だ。とても載せきれない」

と、ヨハネ伝の終りの方に書いてあるとおりです。だから、御霊はその載せきれない言葉を無限無量に自在に受けとらせてくださる。決して主観ではない。

●人間の中心は霊

聖霊のバプテスマのことを学ぶのに、何といっても、ヨルダンにおけるところのキリストの受洗をぬきにしては語れない。洗礼のヨハネがヨルダン川で、

「お前たちは悔い改めろ、心の向きを変えろ。回心しろ、心をめぐらせよ」

という悔い改めの回心のバプテスマを、水に浸してやっていた。そこに、イエスがやって来た。

「あなたは私からバプテスマを受けるような人ではありません。あなたの靴のひもを解くにも価しない私です。私は水でバプテスマをするけれども、あなたは聖霊と火でバプテスマする方です」

と言いました。「聖霊と火」と言ったって、聖霊と火は同じことです。聖霊なる火をもって、あるいは、聖霊なる水をもってバプテスマする。

「聖霊なる火、聖霊なる水、聖霊なる風」

何と言ったっていい。「霊（れい）」は「霊（ひ）」とも読む。受霊（うけひ）という。どっちも「ひ」なんだ。人間の一番の中心は霊、魂です。その一番の中心のところに上から神の霊がかかってくる。それを直にやったのが、キリストのヨルダンにおけるバプテスマです。悔い改め、回心の必要のない人が、私たちに代わって、私たちと同じ次元に入って、私たちのどん底に立って、そして回心のバプテスマを受けられた。キリストが私たちに同情してくださるというのは、感情ではない。具体的にこの私の底に担いの体勢で立ってくださる。これがキリストの実力ある同情なんです。

自分を何ものともしないんだから、その中に入ってしまう。そして、水から上がってきたら、彼だけ――他の人はみんなダメ――彼だけは、聖霊が鳩の如く臨んできて、天から

「私はお前を悦（よろこ）ぶ、わが愛（いつく）しむ子である」

という声がかかってきた。

「神が我を愛し給う、神が我を悦び給う」

と。キリストはそのようにして神の悦びに入ったときは、どういうときかというと、本当に平伏（ひれふ）して、そして聖霊を受けた。これは決定的なことである。

●聖霊のバプテスマ

私はこないだキリスト新聞の『橄欖（かんらん）』というところに書いた。

「我々悔い改めを要する者のどん底に立ち、ヨルダンに身を浸して水のバプテスマを受けたイエスは同時に天来の聖霊のバプテスマにあずかった。これは決定的なでき事であった。続いて起きたのは、曠野におけるサタンとの一騎討ちであった。イエスは聖霊にあってどこまでも神一切、神主体をもってサタンと戦って勝ち給うた。霊力を私している傲慢なサタンと、霊力を神のものとして戦った無私のイエスを思うとき、ここに地獄と天国の差を見る。霊的傲慢は最大の罪である。霊的無者イエスにこそ神の権威があった。

17年前、ドイツのハンブルク大学で日本学の講師をしていたとき、日曜毎にかの地のルター教会で礼拝を守っていたが、そこの副牧師が私に集会の聖書時間の担当を依頼した。その牧師が私に、どうしてそういう心境になったのですかと訊ねたので、私は、深山の祈りにおいて直接天界から聖霊のバプテスマに与ったからですと答えた。かの地を去るにあたり教会新聞に「聖霊のバプテスマ」と題して一文を草し、これは現代キリスト教界一般の焦眉の問題（ブンレンネンデ　フラーゲ）であると書いた。キリストが十字架で贖罪の大業を果たされたあと、使徒たちはあのペンテコステにおいて、パウロはダマスコ途上において、聖霊の鮮やかなバプテスマに与った。パウロは更に曠野の瞑想と祈りをもって十字架の真義を知り、聖霊にあって大伝道を開始した。

「キリストの御霊なき者はキリスト者にあらず」（ロマ8・9）

と彼は明言した。世紀末が近づいて来た。今やこの霊的次元の使徒的信仰へ突入し、キリスト者各自が第二の宗教改革を身証すべきではないか。」

これはキリスト新聞に五回書いたうちの最後にこれを

「聖霊のバプテスマ」

と題して書いた。こういうようなことをはっきりと言う人が――これは告白です、説明ではない、説教ではない――そういう人が今のキリスト教界に非常に少ないわけです。ペテロは「無学の凡人（ただびと）」であったが、御霊を受けたら本当に聖霊の権威をもって、あれだけの使徒行伝のペテロとして身証したではないですか。皆さんは一人びとりが――生まれつきの性格や才能がどうであるかではない――「人、新たに生まれる」んです。どうぞ、

「そういうような証人として生涯をこれからやる、これが人生の究極目的である」

ということです。

●無即無限無量

聖霊の世界には深い悲哀がある。十字架道という――

「キリストは悲しみの人」

とイザヤ書53章にも書いてある――ただ喜んで、ワッショイワッショイと、写真をとれば笑顔ばかりしているのとは違うんです。悪いとは言わない。

なにも、深刻な顔をしろと言うのではない。この世界、この滅びゆく20世紀、神の悲しみ、これはU君が異言の祈りの中で既にパウロの呻きを聞いている。キリストの涙を聞いている、見ている。しかし、その悲しみは感情的なセンチメンタルな悲しみではない。その悲しみを本当に身に受けて、そしてそれに耐えているのはもの凄い御霊の力がある。十字架にかかったキリストは最大の勇者なんです。どんな英雄豪傑もキリストにはかなわない。これが表向き無力のように見えたキリストの本当の底力です。皆さん、この聖霊の世界というのは、ただ「歓喜、歓喜」ではない。世の苦しみ悲しみ、いろいろな混沌たるサタンの配下にあることに対する戦いがある。また、いろいろな不条理が地上において行われることに対する苦しみを自分で受けとっていく。

キリストは、そのただ一回の御霊のバプテスマをそこではっきりと受けられて、そしてサタンと戦ったのは、神の霊において、神の霊を私しないんです。神の霊はキリストの中に完全に宿っている。全身これ霊なんだ。彼は全く神と一つになっている。

自分を何ものともしない人が、

「我を見し者は父を見しなり」

という――「絶対矛盾の自己同一」というこの境地、これは西田先生の哲学がうまい表現をなさってくださったけれども――その「絶対矛盾の自己同一」の本当の世界はこの聖霊の世界なんです。だから、申し上げているように、

「無即無限無量、ゼロ＝無限大」

だということ。私は何回言うかしらんけれども、いつも言いながら、このキリストの聖名を讃えるようになるだけの話なんです。

キリストがそのようにはっきりと聖霊のバプテスマを受けられた。私たちの本当の範をそこに垂れられた。しかし、範を垂れられたけれども、私たちは真似するわけにいかない。それはキリストも知っていらっしゃる。直接にはみんな聖霊は来ない。ペテロもヨハネも一緒にキリストとご飯を食べたけれども、ダメなんだ。ときには、キリストの按手によって一時的な力は来たよ。けれども、やっぱりダメなんだ。そのこともキリストは知ってらっしゃる。

「今にみんな散る。私をみんな棄てるよ」

と。だけれども、もうひとつ先を見て、

「私が十字架にかかって血のバプテスマを受けたら、今度はお前たちに御霊がくる」

と。

●根源現実

ヨハネ書簡におもしろい言葉がある。ヨハネ第一書の5章7節、

「7**証する者は御霊なり。御霊は真理（まこと）なればなり。**

これも生きた真理です。

8**証する者は三つ、御霊と水と血となり。この三つ合いて一つとなる。**」（ヨハネ一**5・7～8**）

何のことですか、これは。「御霊」はもちろん聖霊のことである。「水」というのはヨルダン。「血」というのはゴルゴタ。ペンテコステとヨルダンとゴルゴタだ。聖霊降臨と水の悔い改めと血の贖い、この三つは離すことができない。我々の実存にとって一つだよと。ヨハネは果してそこまでの気持で言ったかは知らんけれども、私はそうとってしまう。乱暴だから。聖書の文句すら、御霊に導かれると――そんなことをあまり勝手にやっては困るけれども――ときには、本当にそれをひとつのきっかけとして、ぐっとそれに連なる真理をつかまえてくるようなことになる。それでちっとも不安でない。それは聖霊がちゃんとそのことを諭しているから。それは同じヨハネ書簡に書いてある。

「神の油が注がれた者にはすべての真理をわきまえる。人が教える必要がない」

と書いてある。だから私は、

「語るも聞くも同じことだ」

と言っている。ヨハネ第一書の3章9節、

「9**凡て神より生まるる者は罪を行わず、神の種その衷（うち）に止まるに由る。彼は神より生まるる故に罪を犯すこと能わず。**」（ヨハネ一**3・9**）

と。ヨハネはえらいことを言ってしまった。

「凡て神より生まるる者は罪を行わず」

と。直接神から生まれる者はいませんよ、キリストを通さなければ。けれども、いちいちそんなことを言ってないんだ、この使徒たちは。

「キリストに在って神から生まれる者は罪を行うことがない」

と。

「けれども、クリスチャンも罪を行うじゃないか。それは困るではないか」

なんて。いいよ、いくら困っても。現実がどんなにそこに矛盾なものがあっても、本当にそこにあるときには、罪を行うわけにはいかん。もう罪すら問題になっていない。そういう恩寵のもの凄い力強いところをはっきりと言っている。カントが、誰も行うことができなくても道徳法則の峻厳なことを言ったでしょ。それと同じです。それが行えるか行えないか、そういうようなことはいい。その奥の本当の世界をはっきり言えば、その中に信入

していけば、信じ入っていけば、そのような根源現象が、根源現実がだんだん開示されてくる。

相対的な自分をしょっちゅう眺めていて、

「今日はちょっと調子がわるい」

「だいぶ信仰的になった」

なんてやっている。ちょうど空の雲と同じで、

「今日は晴れた、また曇った、雨になった、雪になった」

なんて。雪が降ろうが、雨が降ろうが、風が吹こうが、雷が鳴ろうが、もうひとつ上の世界は晴れ渡って、いつも月と星と太陽が見えるような、そういう成層圏的な現実を言っている。このヨハネは成層圏的な、絶対恩寵の現実をはっきり言ってしまっている。そこらを蹲かないでください。そういう構造というものは平面論理では解説できない。それを何のかんのと辻褄を合わせようとするからおかしなことになる。矛盾構造でいいんです。いいということは、神の国が来るまでは矛盾構造をごまかしてはいかん。けれども、その矛盾の奥の世界では本当のドラマチックな調和になっている。

●預言者は単独者

キリストはたったひとり直接に神さまの霊を受けました。さすがに神の子だから。聖霊でもって生れてきた特別な神人ですから。けれども、そのような神人の、神人的な新人にお前たちを変えようというのがコリント後書の言葉です。

「栄光より栄光に進み、主の御霊によりてついに主の姿に化するなり」

とパウロが言った、これがその

「神人によりて新人とせられていく」

わけです。

使徒行伝9章のパウロというやつは――これは「やつ」でいいよ、悪いことをしやがったから。私も小池というやつですからね。

「小池先生」

なんてあまり言わないでください――このパウロというやつはキリストを信ずる者たちを迫害していた。キリストは、キリストを信ずる者たちへの迫害を、

「なんぞ、我を迫害するか！」

と仰った。キリストはそのような人たちと本当に一つであるという本願をもってその人たちを顧みておられた。だから、「なんぞ、我を迫害するか」と言われた。

「なんぞ、我を信ずる者たちを迫害するか」

とは仰らない。相手がキリストですからね、パウロは参ってしまった。

「新興宗教のけしからん親玉だ」

と今までは思っていた。ところが、その新興宗教のけしからん親玉のキリストが、「なんぞ、我を迫害するか」と、復活のキリストが権威をもって、霊言をもって彼に霊撃したわけです。パウロはぶっ倒されてしまった。

キリストに反抗していたパウロが本当に打たれて、しかも、アナニヤにちゃんとその示しがくる。パウロにもちゃんとキリストから示しがきて、同じことが両方に言われている。なんと素晴らしい世界でしょうかね。聖書の現実というのはこんな凄いんだからね、いい加減な気持で読めるものではない。その逆らっていたパウロが、御霊でもって本当に引っくり返された。これはキリストのもの凄い切ないところの愛がかかっている。聖霊の愛が。とにかく、彼は方向は違うけれども、その熱心はキリストを信ずる者を迫害していたが、その魂をキリストは逆用しようと思った。パウロは逆らっていたけれども、ただ一人彼は引っくり返された。

預言者たちがそうです。預言者たちが曠野でただ一人呼ばれて、そして神の器にされた。旧約の預言者たちはみな単独者です。よく、教会的な神学者たちは、

「エクレシヤというものが先だ」

と、そればっかりを言う。もちろん、使徒行伝第2章のペンテコステでは、みんな本当に一緒になって祈ってました。「心を合わせて」と書いてあります。キリストの母もいたし、使徒たちもいたし、みんなで本当に十日間祈っていた。だから、いろんな場合があるわけです。いろんな場合があるけれども、ごっちゃにしたら困る。パウロは一人だけれども、こっちは大勢です。

●個即全・全即個

「1五旬節の日となり、彼らみな一処に集い居りしに、2烈しき風の吹ききたるごとき響き、にわかに天より起こりて、その坐する所の家に満ち、3また火の如きもの舌のように現れ、分れて各人のうえに止まる。4彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。」（使徒２・１～４）

ここに、

「一人びとりの上にとどまる」

と書いてある。即ち、個即全、全即個という関係において来ている。今の民主主義というやつは、ただ多数で決めて、一人びとりはまことにどうも何だか訳の分からないようなもの。大勢になると何だか妙な説になったり、力になったりするような。そういうのを衆愚主義というんだ。本当のものはやはり、個というものがはっきりしている。

一人びとりの上にとどまる。聖霊が一人びとりの上に臨む。それがみんなで祈っていようが、あるいは一人で祈っていようが、とにかく、一人びとりにまちがいなくやって来る。

ですから、「個」というものが、「一」というものがどんなに大事かということ。他人を頼りにしているうちはダメなんですよ。

エペソ書4章4節から、

「4体は一つ、御霊は一つなり。汝らが召にかかわる一つ望みをもて召されたるが如し。5主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、6凡ての者の父なる神は一つなり。神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの内に在したもう。」（エペソ4・4～6）

「神は凡てのもの上に超在し、凡てのものに貫在し、凡てのもの内に内在したもう」と。キリスト者もこの「一者」の――この集会が本当にキリストの体としての、エクレシヤとしての実を表わすためには――一人びとりがその一者の自覚を持たなかったらダメなんです。そして、この一者が全を――一即全、個即全という――この個が全を担うような個であるときに、「個即全」ということがいえる。一人びとりが全体を本当に担っている。

どこにそういう言葉がありますか。旧約聖書にある。エレミヤ記5章、

「1汝等エルサレムの邑をめぐりて視かつ察りその街を尋ねよ、汝等もし一人の公義を行い真理を求むる者に逢わば、われ之（エルサレム）を赦すべし。」（エレミヤ5・1）

「エルサレム全体がたった一人にかかっている。一人の義人があれば赦してやる」と。これが個即全の個なんです。救いはキリストという個を通して全世界に来た。皆さんの第二の宗教改革は、一人びとりというこの個が、一人がやっていく。人頼みではない。

「少しみんなでやりましょう」

ではない。おのずから「みんなでやりましょう」になっていけば結構だけれども。「みんなでやりましょう」と言って、何か衆を頼んだような「みんな」ではダメなんだ。

●本当の霊止

キリストは一人びとりに全的に宿りたもうんです。御霊は一人びとりに全的にとどまる。神霊が、キリストの霊が止まる、それを霊止という。それではじめて本当の霊止になるんだから。パウロの書簡をみると、「神の霊」という言い方の方が、「キリスト」よりも多い。ヨハネでもそうだけれども。キリストに宿ったところの霊によって初めて彼らも救われたんだから。パウロにはもっと「キリストの霊」と言ってもらいたかったくらいです。

聖霊のバプテスマはひとごとではない。一人びとりが本当に、パウロがダマスコ途上で受けたように――パウロみたいな悪い野郎に、逆らっていたやつのところにやって来たんですから――あなた方みたいな従順な方々にはもっとはやく楽に来るわけなんだ。パウロすらもバプテスマを受けたんだから、いよいよもってやって来る。失望することははない。

「私はパウロみたいな悪いやつだが」

と言って平伏して受けとっていく。パウロは、

「**自分は罪びとの首だ**」

と言ったでしょ。内村先生も、

「自分はパウロと同じように罪びとの首だと言いたい。私が救われるんだから、万人は救われるんだ」

と、万人救済を内村先生は自分の体験から言われた。

「私みたいやつが救われたんだから、みんな必ず救われる」

と、内村先生もそのパウロ的な自覚を持っておられた。だから、十字架がなくては、先生はいられなかった。

讃美歌に、

「我もなく、世もなく、ただ主のみいませり」

とある。「ただ主のみいませり」というのは、ただ客観的に言っているのではない。我も世もこんなものはもう問題でなくて、主が全部貫いている。

「神は超在し、貫在し、内在する」

と書いてあったが、あれは「キリストは」でいい。

「キリストは超在し、貫在し、内在し、遍在したもう。御霊をもって至るところに」

御霊のバプテスマの歴史的な構造からいうと、キリストのバプテスマ、パウロのバプテスマ、それからペンテコステのこのバプテスマの、この三つです。これをよく身読して、そしてその中に私たちが個として本当に、

「私の生命はやはり御霊ではなければありませんでした。御霊は、何ものとも代えることができませんでした」

と。そういうクリスチャンが一体、幾人いるんですかね。

パリサイとはキリストは戦われたんです。己を義とし、己の信仰をよしとしているような、そういうご連中、己の実存を誇っているようなご連中です。神の人キリストは自分を、

「なぜ私を善いと言うか」

と言うような、そういう本当の神一切の自覚である。私たちはキリスト一切の自覚ならざるをえない。在りながらすっとんでいる。絶対矛盾ですよ。私はここに在りながら、私はいないんです。

●キリストはわがために砕けたもうた

どうぞ、そういうことで、もう何も問題はない。あなた方自身が本当にキリストに在って、十字架のキリストに在って自分というものが問題なくなってごらんなさいよ。「十字架、十字架」とプロテスタントでも言うけれども。

「**十字架せられたり、もはや我れ生くるにあらず。私はいないよ。ただキリス**

トだけが生きているよ」

という、あのパウロのガラテヤ書2章20節もよくプロテスタントも使うんだけれども、結局、命題になって信じている。ただの命題になっている。そこが違う。命題を信じているか、それを本当に現実として身をもって受けとっているか。全部、全存在的です。

その聖霊のことを、「神の種、スペルマ」と言ってみたり、あるいは「油」と言ってみたり、表現はどうでもいい。「キリスト」とは「油注がれたるもの」ということ。我々は「霊」という油を注がれたる者。私たち自身がみんなキリスト、油注がれた者なんです。ただ、イエスだけが別な意味で、「キリスト」という固有名詞みたいになってしまっているけれども。我々もみんなキリストなんです。ルターが大胆に、

「小キリストとなれ」

なんて言っているところがあります。

イザヤ書は66章全体に貫いて非常に高次な聖霊の世界が展開しています。特に第二イザヤの40章から55章。また第三イザヤもそうですけれども。あれは、しかし、「エホバの霊」ではありますが。

ヘブライ語では「ヤハウェー」という。それを「エホバ」と読み間違えた。「ヤハウェー」というところを「わが主」と呼んだら、それを「エホバ」と読むことになってしまった。

「わが主にして実存者なるもの」

という意味を「エホバ」という表現が持っているから、私はむしろ昔の「エホバ」という言い方がこの頃は好きになってしまった。「ヤハウェー」なんて言うよりか「エホバの神」と言った方が、

「わが主にして実在したもうところのもの」

という意味で、そういう気持で呼ぶ。他の人たちは学者の言うことばかり聞いているが。「エホバ」という「わが主にして実存者」というのは、実はキリストですよ。「南無阿弥陀仏」の「アミッター」もキリストだと言ったでしょ。それほどまでに、「キリスト」と言うと、降臨のキリストから再臨のキリストまで、それが渾然（こんぜん）として、「主さま」と言えば、その歴史的な構造において、過去と現在と未来をそこに直ちに自在に響いてくる。そういった重厚な響きとして、

「主さま！」

という言葉が、

「南無キリスト！」

という祈りが、自分のものにどうぞ化体してください。呼ぶことが、呼びあげることが、直ちに内なるキリストになってしまう。

「主さま！と言えば、主はわが内に在りたもう」

と。御霊のバプテスマというのは実に、霊光石火的です。日常生活においては、御霊が。

「主さま、私はいません。あなただけです。今、私が生きているのは、あなたがこうやって生きてくださっているからです。空気は身体が吸っているように、御霊が私の中の生命です。活かしたもうところの主よ」

と。そういうようなことで、「バプテスマ」なんて言ったって、ひとつも難しいことはない。十字架を本当に受けとっていれば。さっきから申し上げているとおり、

「これは一つなり」

とヨハネが言っているとおり。十字架にぶつかって初めて本当の悔い改めになるんだから。悔い改めてから十字架に来るのではない。十字架の贖罪の恩寵にぶつかって、初めて本当に砕けるのだから。

「私はまだ砕けません」

なんて、なぜ言うか。キリスト自身の砕けをいただくだけのはなし。キリストがわがために砕けたもうのだから。絶対恩寵として、

「ああ、こんなやつのために、この我執のやつのために」

ということ。

●無我・無私

西郷南洲が、

「道は天地自然の物にして、人は之を行ふものなれば、天を敬するを目的とす。天は人も我も同一に愛し給ふゆえ、我を愛する心を以て人を愛する也。」

と、キリストが仰ったような言葉を言っているね「己の如く人を愛すべし」と。

「己れを愛するは善からぬことの第一也。」

と書いてある。

「人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして、己れを尽くして人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。」

もう、尋ねなくたっていいんだよ。本当になれば、自分を顧みるということよりもキリストを見ることの方が楽しいし、また本道だから。本願を受けとることだ。

「内村鑑三」なんて、日に三度鑑みるということで、「鑑三」と付けられたらしいけれども、あれはお父さんが漢学者だから。しかし、「鑑三」はやめたんだよ、内村先生は。キリストだけを仰いで、キリスト端倪（たんげい）になったんだ。

「道は天然自然の道なるゆえ、講学の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに克己を以て終始せよ。己に克（か）つ極功（きょくぐう）は「意母（な）し、必母し、固母し、我母し」と云へり。」

と。これは論語の中の言葉です。

「意母（な）し、必母し、固母し、我母し」

と。要するにこれはみんな、「意なし」、自分の意志だとか、「必なし」と。自分の必定とい

うような、こちら側の非常に固い何ものかです。「固なし」、これもそうです、固まっているものがない。「我なし」、要するに我執、自我。その極致は我執のない世界である。無我、無私の世界である。その最後のところは「無」の一字でたくさんだ。「無者」だ。無者であることだと。けれども、それはいかにして可能かは、福音の世界に来なければできない。孔子はそう言ったけれども。南洲はその気魄をもってかなりその境地に来た偉大な人物だ。

もう一人は、佐久間象山です。日本のダ・ビンチみたいな人だ。最初に電信機を作った。写真機も作って、自分の像も写した。大変な人だ。「和魂洋才」なんてことを言っているけれども、信仰の世界で果たしてどれだけのことだったかは知りませんが。とにかく、非常に求めていた。彼はこういう自覚を持っていた。

「余、年二十以後、乃ち匹夫にして一国に繋ることあるを知る。

この私みたいなつまらない者も二十歳になると、一国即ち松代藩に係わることを知ると。

三十以後、乃ち天下に繋ることあるを知る。

三十を越えたら、自分の存在は天下と係わりがある。

四十以後、乃ち五世界に繋ることあるを知る。」

四十を越えたら、全世界に係わりあるを知ると。そういう気宇の偉大な自覚を持っていた。明治の初年の人はね。彼のお弟子さんには、勝海舟だの、吉田松陰、坂本龍馬、橋本佐内、加藤弘之というようなご連中がいる。これは最初の塾長だ。尊皇攘夷論者に京都で殺されてしまった。

●信入・祈入

皆さんは、聖霊を受けたら、一人びとりを通して何か、人が知ろうと知らないと、創造的なクリエイティブな、神さまのキリストの創造の力が臨んでいる。聖霊というものの内容は、愛とも働き、また病を治す力ともはたらき、また病が治らなくてもそれに打ち勝つだけの力をいただく。知識の上でも、また何の上でも、聖霊は――コリント前書12章に書いてあるとおり――様々に自在にその人を通して神さまが、キリストがなしたもうところのことをしてくださる。

だから、運命環境に絶対に屈しなくなるんです。どんな運命でも、どんな環境でも。結婚がうまくいかなかろうが、就職がどうであろうが、そんなことをもうひとつ超えたところの、驚くべき魂に私たちはならなかったら、聖霊の人でないです。女の方々は、第二の国民の――それが現実に肉の母であろうとなかろうと――本当に母である。

「歴史は女性がつくる」

とゲーテが言っているとおりです。それだけの使命を負っている。日本の教育はわるいけれども、家庭においてお母さんが本当に魂の教育をすれば、その悪い世の中の風潮に敢然として戦う魂が出てくる。

もう学校にも期待することができないような日本の教育界。あとは塾と、それから信仰を持ったお母さんたちのほかに期待ができないじゃないですか。しかし、本ものが一人できれば、動いていきます。だから、さっきから私は個ということを言っている。聖霊が個に本当に全的に宿って、キリストが本当に全的に一人びとりに宿りたもう。それでなかったら、信仰なんてつまんないです。

この聖書を読んでごらん。どんなにパウロやペテロやが御霊のことを語っているか。驚きなんだ。新しく読んでごらんなさい。こんなに聖霊のことが書いてあったかと。私は阿蘇で手島さんと集会して、帰りに汽車の中で驚いた。聖書の文字がもう躍動しているんだ。

キリストの霊はこの相対的な私たちの中に宿りたもう。この空間は限られた空間だが、窓が開いているから、無限の空間と一つとなっているじゃないですか。有限即無限ではないですか。私たちの中に無限のキリストの霊をいただけば、自在になる。もう言葉でなんかで限定できない。だから、

「聖霊を受けないで、何のキリスト者であるか」

とパウロが言っているとおり。あのようにキリストに逆らっていたやつがキリストに引っくり返されて、

「もう私はキリストの弟子だ、キリストの僕だ」

と。私はそこに「キリストの僕パウロ」と書いた。主の僕パウロ。私たちは主の僕、主の婢女、それが本当の自由を持っている。ガラテヤ書に書いてあるとおり。

「御霊の在るところに本当の自由あり」

と。自由は人をけなす自由ではない。自由は人を自由にすくいあげるところの力です。愛の力、智慧の力。何であってもそこは本当の生命的な力を持っている。霊生を、霊の生命を持っている。

その鍵は、祈りです。祈入すること。祈入することと信入することは同じこと。信ずるも祈るも同じこと。信入、祈入の世界。いずこにおいても、グーッと深い沈黙の祈りをしなさいよ、一人で。私は深い沈黙の祈りを一人でしていると、もうグーッとキリストの中に入れられてしまって、そして爆発してくる。振動してくる。相対的なことはみんなそこから始まる。もういわゆる信仰は決断でも何でもありません。決断したって、そんな決断はまたすぐ揺らぐよ。こっち側の何も信じない。自分の側の何も信じない。自分の信仰すら信じない。逆説的な言い方をしますよ。私の気合がわかりますか。

もう、即刻です。皆さんは、今日でもってみなひとつの段階を、質的な段階を乗り越えて進んでいかなくては。

「そうか、お前たちは私の中に入ったか」

と、キリストが悦んでくださる。

「われ汝を悦ぶ」

という声が一人びとりに本当に来なくては。「汝らを」ではないよ、「汝を」と言うときに初めて「汝らを」になる。

●魂の問題

小学校の私の作文の先生が、

「作文の題を出されたら、必ず自分に引き合わせて書きなさい。一般的な考えで書いたってダメだ。力がない。必ずその題を自分に引き合わせて、そして自分のことに関わりあるものとして書け」

と言った。これは日本の小学校の作文の教育の面ではある画期的なことを言った人なんです。芦田先生という、今でもありありと私は思い出します。非常に迫力のある情熱のこもった先生でした。

やっぱり何年たっても、全身を投じて情熱をもって教えてくださった先生は忘れることができない。何か私の一画をなしている。そういう先生が大事なんです。学校の施設はいろいろ良くした方がいいでしょう。けれども、それは二の次なんだ。どんなに破れ学校であっても、そこに先生方の魂が本当に生徒ととっくんでいるという学校が本当の学校なんだよな。いわんや塾においてをや。家庭も同じこと。父や母が子どもに遠慮しているような今の日本は何だというんだ。本当の信愛関係というものが、親の権威というものがない。日本は本当にこれどうなんですか。政治家も、南洲のような明治維新のような人物が欲しい。本当に国を憂えるひとが。政争のことばっかりで、

「そのためには党がくずれても」

というようなのがいない。結局すべてが、ひとりの個の、魂の問題です。いいですね。そうしたら、もう運命環境にびくともしない。逆に本当に展開していく人になる。

「どうもあの人は私よりも幸せだ、回り合わせがいい」

なんて、何を言うか。

十字架の担いと聖霊の栄光と、これは十字架の担いも御霊が来ているから担いができる。

「汝らは己が十字架を負いて我に従え」

という、負うことのできるのは御霊の力なんです。

どんな苦難にいても、女の方がそういうことをひとつも苦にしないような顔してニコニコしている。それは麗しい。聖霊における微笑は一番うるわしい。

聖霊の世界には深い悲哀がある。十字架道という。

「キリストは悲しみの人」

とイザヤ書53章にも書いてある。